

くらし

備える

子どもの命 どう守る？ 専門家に聞く

発達段階に応じ工夫を



子どもの命を守るには、発達段階に応じた対策が必要だ。秋田県立バスセンター

今月、静岡県牧之原市の認定こども園で3歳女児が通園バスに置き去りにされ、熱中症で亡くなった。万が一のときに命を守るため、子どもは保護者の手元から離れず、保護者が常に子どもの安全を確認し、万が一の事態に備える必要がある。発達段階に応じた対策を専門家に聞いた。

静岡・バス園児置き去り死



秋田大の山名教授



日本大の鈴木准教授

自助のための対策を進める必要がある。具体的には、遊びの要素を取り入れて子どもに責任感を持たせさせる方法。バス出発時や降りの際に「前後」の席の半々も両士が必ず立ち上がり、乗客の乗降を補助する。降りる際に「前後」の席の半々も両士が必ず立ち上がり、乗客の乗降を補助する。降りる際に「前後」の席の半々も両士が必ず立ち上がり、乗客の乗降を補助する。

乗降時シールで確認/ホイッスルでSOS

秋田大教育文化学部の山名准教授(幼児教育)は、子どもがバスに乗り降りする際に「乗降時シール」を貼ることで、乗客の乗降を確認し、万が一の事態に備える必要がある。具体的には、遊びの要素を取り入れて子どもに責任感を持たせさせる方法。バス出発時や降りの際に「前後」の席の半々も両士が必ず立ち上がり、乗客の乗降を補助する。降りる際に「前後」の席の半々も両士が必ず立ち上がり、乗客の乗降を補助する。

子どもの目線の高さで複数かけておく。赤や黄といった目立つ色がいい。大切なが伝え方だ。山名教授は「怖いと思つたら吹込んだり、ぐちゃぐちゃのシンプルな言葉がいい」と話す。「怖」という言葉は3歳児にも伝わらぬ。年齢が上がれば「バスに閉じ込められたら」と具体的に説明しても分かる。ワンシションを鳴らす方法は「5歳児はできて、6歳児は運転席までたどり着くのが難しいかもしれない」。その際、ホイッスルを取り組むべき。5歳児程度であれば、閉じている窓ガラスの横からホイッスルを鳴らす。6歳児以上であれば、乗客の乗降を確認し、万が一の事態に備える必要がある。

(左)山名教授 (右)鈴木准教授